

令和六年度 入学試験【第一回・午前】

国語試験問題

二月一日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄らんに記入しなさい。

京華中学校

受験番号
氏名

余
白

問題は次のページから始まります。

余
白

「次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。」

「あ、あのおっ！」

声^aが裏返^{うしろへ}つてしまった。一瞬^{いっしゆん}の間のあと、忍^{しのぶ}がかすかに唇^{くちびる}を持ち上げ、宇太佳はおれを見てひとつうなずいた。

「あの、今日は提案がありますっ」

みんなは依然^{いぜん}として、Aでおれたちを見ている。ヤベツ、心臓^{しんざう}がばくばくしてきた。忍^{しのぶ}が、ちょっとおれの肘^{ひじ}を突いて目配^{めばい}せる。忍^{しのぶ}は人前で話すのが得意だ。出だしは忍^{しのぶ}に任^{まか}せた。

「みなさん、終戦^{しうせん}日にこの町に空襲^{くうしゅう}があつたことを知っていますか？」

忍^{しのぶ}が、クラス全員に語りかけるように声を出した。クラスがざわめく。

「なにそれ」

「知らない」

「なんの話？」

などという声^{こゑ}が耳^{みみ}に届^{とど}く。

「しずかにしてください」

宇太佳^{うたけ}が言い、それから忍^{しのぶ}と宇太佳^{うたけ}がおれを見て促^{うなが}した。おれは小さくうなずいて、息^{いき}を大きく吸^すった。^b

「花林神社^{はなりんじんじゃ}には、管理人^{かんりじん}の田中喜市^{たなかきし}さんという人が住んでいます」

大きな声^{こゑ}で言^いつたら、緊張^{きんちやう}がとれた。

「田中^{たなか}さんは、八十五歳^{はちじゅうごさい}です。この町^{まち}にずっと住^すんでいます。終戦^{しうせん}のとき、田中^{たなか}さんはおれたちと同じ十一歳^{じゅういちさい}でした。田中^{たなか}さんは戦争^{せんそう}で家族^{かぞ}を亡^なくしました」

教室^{きやうし}がしずまる。

「田中^{たなか}さんは、戦争^{せんそう}の語り部^{かたべ}をやっています。田中^{たなか}さんに、ぜひ学校^{がっこう}に来てもらって、戦争^{せんそう}についての講演^{こうえん}をしてもらいたいです」

みんな、Bでこつちを見ている。

「この企画を、ぜひみんなに協力してもらいたいです！ お願いします！」

大きな声で言つて頭を下げると、忍と宇太佳も「お願いします！」と言つて、頭下げた。誰かが「へえ」と言い、誰かが「いいじゃん」と言つた。

「賛成の人、手をあげてください」

いきなり立ち上がつて、 をとつたのは小野田だ。小野田が自ら手をまつすぐにあげると、クラスの間みなも次々と手をあげた。けれど、手をあげない人もいた。

「反対の人、意見をお願いします」

小野田が手をあげなかつた生徒を指名する。

「準備が大変だと思います。ぼくは中受*ちゅうじゅを控ひかえてるから、授業時間を減らされるのは困ります」
真面目男子が意見する。

「なるほど。そのへんのことはどう考えてますか？」

小野田がおれに振る。

「授業には支障が出ないようにします。学級活動の時間内や放課後に準備したいと思っています。もちろん塾じゅくや習い事がある人は、そつちを優先してくれてかまいません」

忍だつて中学受験組だ。支障があつたら困る。

「でも実際、今日の五時間目の理科の授業をこんなことに使つてるじゃないですか」
うぐつと言葉に詰まる。

「すまんすまん。それは先生が決めたことなんだ。今日の理科の授業はどこかで必ず埋め合わせをするから」
トランクスが謝あやまつた。かすかなブーイングは、今日の理科の授業がなくなつて喜んでゐる連中だろう。

「他の反対意見ありますか？」

小野田が仕切る。

「はい」

と、女子が手をあげた。

「わたしは、人がたくさん死んだ戦争の話なんて聞きたくありません。そんな怖い話をわざわざ聞きたくないです。悲しい

気分になるし」

クラスが一瞬しんとして、そのあとざわついた。おれも思わず忍と宇太佳の顔をすぎるように見てしまった。そんな意見が出るなんて、びっくりしたのだった。

「なるほど。貴重なご意見をどうもありがとうございます。もしかしたら、戦争の話を聞きたくない人が、他にもいるかもしれない。それについてはどう思いますか？」

聞きわけのいい、つまらない司会者のようにまとめて、小野田がこつちを見た。おれは反射的に目をそらした。なんて答えたらいいかわからない。実のところ、内心ムカついていた。聞きたくない、つてなんだ？ 大勢の人が亡くなった戦争じゃないか。怖い？ 悲しい？ その場になかった人間がなに言ってるんだ！

「正直な気持ちを教えてくれて、どうもありがとうございます」

忍が頭を下げた。おれの顔を見て、拓人じゃ無理だと思ったんだろう。賢明だ。

「戦争では大勢の人が亡くなりました。兵士だけではなく、一般の人たちもたくさんです。軍人が二百三十万人、民間人が八十万人死亡したと推定されています。尊い命が次々と消えていきました。民間人というのは、ぼくたちのことです。ぼくたちや家族が戦争に巻き込まれて死んだっていうことです」

「だから、それは昔のことで、今のわたしたちとは関係ありません。日本はもう戦争しないでしょ。憲法第九条に戦争放棄について記載されています」

怖い話を聞きたくないと言った女子が、忍に反論する。憲法九条？ 戦争放棄？ 難しい話になってきた。ついていけない。

「いや、戦争に参加する可能性はあります。可能性がゼロなんてものはこの世にない。現に自衛隊はイラク戦争に派遣された。人道復興支援活動つてことだけど、現地でどんなことがあったのかはわからないだろ。集団的自衛権だつてそうだ。日本が攻撃されなくても、海外での自衛隊の武力行使ができるようになったら。憲法九条なんて意味ねえじゃないかよ」

忍の顔が赤い。口調が悪くなったのも、興奮したせいだろう。忍の言ったことは、おれの知らないことばかりだった。

「……なによ、そんな言い方しなくてもいいでしょっ」

「ちよつとちよつと、ケンカはやめてください！」

小野田があせつたように仲裁に入る。

「冷静に話し合いをしましょうよ。ねっ」

C で小野田が首を傾げた。

「あの！」

無意識のうちに声が出た。

「あのさ、戦争のことも大事だけど、おれはただ田中さんのことを知ってもらいたいんだよ。花林神社の管理人をしているおじいさんのことを、一人でも多くの人に知ってもらいたいんだ。田中さんは、おれたちと同じ歳だったときにお母さんと妹さんを空襲で亡くした。そんなのって、ちよつと想像つかないだろ？ 急に家族がいなくなつたんだよ。それって、確かに怖いし、悲しいことだけど、田中さんはそれからの人生、一生懸命生きてきたんだ。田中さん、すつごくいい人だよ。おれも年をとつたら、あんなおじいさんになりたいって思った。そんな田中さんのことを、みんなに紹介したいんだよ。それだけなんだよ」

クラスがまた一瞬、しずかになつた。ヤベ、やつちまつたか、と思つたすぐあとで、

「いいね、その通り」

と、宇太佳が言つて、

「だな」

と、忍が続けた。

それからまた少し話し合いがあつた。真面目男子は、勉強が遅れないならいいと言い、戦争の話聞きたくないと言つた女子は、田中さんの人生の話ならと、了承してくれた。

「他に、田中さんに講演をしてもらうことについて反対の人、いますか？」

小野田の問いかけに、手をあげる生徒はいなかつた。

「では、花林神社の管理人である田中喜市さんに、学校で講演をしてもらうことに賛成の人、手をあげてください」

おれは一人一人のクラスメイトの顔を見ていった。全員だ。全員の手があがつた。胸に熱いかたまりが突然現れたみたい
に、ぼわんと熱くなる。

「ありがとうございます！」

三人で声がそろつた。忍も宇太佳も満面の笑みだつた。もちろんおれも。

具体的な企画についてクラスで話し合い、日程や場所を決めて、校長先生に許可をもらいにいくことになった。いちばんの問題は、誰に聞いてもらうかだ。六年生だけじゃなくて、この学校の生徒全員に聞いてもらいたいのはもちろんだったけれど、できれば親や地域の人たちにも聞いてもらいたい。

「PTAに話してみればいいんじゃない？」

と言ったのは、またしても小野田だ。小野田のお父さんが、今年度の保護者会の会長なのだ。

「そこから保護者たちに連絡^{れんらく}してもらって、自治会の回覧板で伝えてもらえばいいんじゃない。どう？」

「ナイスだ、小野田！今日の小野田はさえている！」

忍が大げさに言って、クラスのみんなが笑った。てつきり怒^{おこ}ると思った小野田は、得意げに胸を張って鼻の穴をふくらませていた。もしかして、忍のことが好きなのか？なんて思ったけど、そんなことはどうでもいい。今日の小野田は確かにさえている。

みんなでいろいろと話し合って、担当のグループに分かれて計画を練っていくことになった。チラシを作って、近所のスーパーや商店街、習い事先などに配ることも決めた。

「実はさ、今日の提案のために、戦争について勉強してきたんだ」

と、忍にこっそり打ち明けられた。忍らしい。どうりで、詳しいと思った。

五時間目だけでは時間が足りなくて、集まれる人だけで放課後にも打ち合わせをした。田中さんのことを、みんなに知ってもらいたい⁴。おれは、腹の底からむくむくと気力がわき上がってくるのを感じていた。

（椰月美智子『昔はおれと同年だった田中さんとの友情』による）

* 中受……中学受験の略。

1. A C にあてはまる言葉として適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア わざとらしい笑顔

イ 怒ったような顔

ウ 不思議そうな顔

エ 真剣な顔つき

2. にあてはまる言葉として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 鬼の首 イ 揚げ足 ウ 音頭 エ 機嫌

3. 線部 a～d を説明した言葉の組み合わせとして最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア a 心配 b 勇氣 c 油断 d 依存

イ a 恐怖 b 決心 c 動揺 d 信頼

ウ a 興奮 b 自信 c 反省 d 仰天

エ a 緊張 b 奮起 c 図星 d 意表

4. 線部 1 に「この企画を、ぜひみんなに協力してもらいたいです！」とありますが、「おれ」がこのように考える理由を説明した次の文の、I Ⅲ にあてはまる言葉を指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

自分たちと I (三字) だったときに家族を戦争で亡くした、花林神社の管理人で Ⅱ (六字) をしている

田中さんに話をしてもらうことで、自分があこがれている田中さんをみんなに Ⅲ (八字) と思っている。

5. 線部 2 に「おれは反射的に目をそらした」とありますが、このときの「おれ」の心情を五十文字以内で答えなさい。

6. ———線部3に「胸に熱いかたまりが突然現れたみたいに、ぼわんと熱くなる」とありますが、このときの「おれ」の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 自分のありのままの気持ちを伝えたものの、みんなが受け止めてくれたか不安に思っていたが、全員が賛成してくれたので、自分の気持ちが同級生に伝わったことがわかりうれしくなっている。

イ 田中さんに講演してもらったことを一部の人に反対され、クラスメイトを説得しようとあせっていたが、全員が賛成してくれたので、講演ができることがわかりほっとしている。

ウ 田中さんに講演してもらいたいという自分の気持ちを熱く語ってしまい反省していたが、全員が賛成してくれたので、本当はみんな田中さんの話を聞きたがっていたことがわかり喜んでいる。

エ 田中さんがすごい人であるという自分の気持ちを理解してくれないことを不満に思っていたが、全員が賛成してくれたので、みんなが田中さんのことを知ることがわかって満足している。

7. ———線部4に「おれは、腹の底からむくむくと氣力がわき上がってくるのを感じていた」とありますが、このときの「おれ」の心情として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 忍が講演の実現のために勉強していたことを知り、講演を最初に企画した自分は誰よりも戦争について学び、詳しくなりたいたいと意気込んでいる。

イ クラスメイトと講演の準備をしていくなかで、講演を成功させたいという気持ちがより一層強くなり、提案者の一人である自分は人一倍がんばろうと思っている。

ウ 反対していた人が講演に賛成し、協力してくれていることがわかり、みんなのために自分が中心となつて準備を進めようと感情が高ぶっている。

エ 企画の発案者である小野田と忍、宇太佳も協力してくれたことで、反対していた人たちを説得することができたため、講演を成功させようとやる気に満ちている。

8. 本文の表現の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア 短い会話文でテンポよく物語が展開することで、主人公の境遇きようぐうを読者が把握はあくしやすくなっている。
- イ 会話文以外の部分でも「！」を使用することで、主人公の心情を読者が読み取りやすくなっている。
- ウ 場面ごとに視点が切り替かわることで、主人公以外の人物にも読者が感情移入しやすくなっている。
- エ 主人公の心情をできる限り客観的に描えがくことで、読者が正確に理解しやすくなっている。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「苦手なところで勝負しない」「得意なところで勝負する」という生き物の基本戦略は、私たちが生きていく上でもとても参考になる。

ただし、気をつけなければいけないのは、それは、生き物の種類ごとの戦略ということだ。

A、「海の中で速く泳ぐ」ことは、すべてのイルカが得意としていることだ。自分は泳ぐのが苦手だから、泳ぐこと以外で勝負しようというイルカはいない。

陸上を一番速く走る動物は、チーターだ。チーターは時速一〇〇キロメートル以上の速さで走ることができる。もちろん、チーターの足の速さも個体差はあるだろうが、走るのが苦手なチーターはいない。

人間の中には、泳ぐのが得意な人もいれば苦手な人もいる。練習しなくても足が速い人もいれば、どんなに練習しても足が遅い人もいる。

【①】

どうしてなのだろう。

どうして、人間にだけ、能力に差があるのだろう。

私たちには、能力に差がある。

¹それは「個性」と呼ばれるものかもしれない。

私たちには、個性がある。

個性と言えばカッコいいけれど、能力の違い^{ちが}ということとは、優劣^{ゆうれつ}があるということだ。頭の良い人とそうでない人がいる。運動神経の良い人とそうでない人がいる。

ときには、それは容姿の優劣だったりもする。

個性があるということは、「差」があるということなのだ。

B、「個性は、努力だけでは変えられないときもある。」

努力しても外見で敵^{かた}わない人はいる。どんなに努力しても能力で敵^{かた}わない人もいる。どんなに努力しても、自分の性格が

好きになれないこともある。

世界の人たちは、平等でありたいと思っているのに、実際には個性という差がある。

2 どうして神さまは、もつと平等な世界を創らなかつたのだろう。

2 どうして神さまは、「個性」など生み出したのだろう。

3 どうして、私たちには、個性があるのだろう。

3 「オナモミ」という雑草がある。

トゲトゲした実が服にくつつくので「くつつき虫」や「ひつつき虫」とも呼ばれている。実を服につけて飾りにしたり、手裏剣のように投げ合つて遊んだりした人もいるかもしれない。

オナモミのトゲトゲしたものは、タネではなく実である。この実の中にはタネが入っている。

オナモミの実の中には、二つの種子が入っている。

この二つの種子は性格が違う。二つの種子のうち、一つはすぐに芽を出すせつかち屋、そしてもう一つは、なかなか芽を出さないのんびり屋である。

このせつかち屋の種子とのんびり屋の種子は、どちらがより優れていると言えるだろうか？

早く芽を出した方がよいような気もするが、そうでもない。

急いで芽を出しても、成長に適した時期かどうか分からないのだ。仮に適した時期だったとしても、問題はある。オナモミは雑草である。気まぐれな人間が、いつ草取りをするかわからない。その場合は、ゆつくりと芽を出した方がよいかもしれない。

早く芽を出す種子と、遅く芽を出す種子はどちらが優れているのだろうか？

そんなことは、わからない。

【②】

早く芽を出す方が有利なときもあるし、遅く芽を出す方が成功するときもある。だからオナモミは、性質の異なる二つの種子を用意しているのである。

私たちは人間は、状況判断を迫られるとどちらが優れているのか、比べたがる。

どちらが良いのか、答えを求めたがる。

しかし、実際には答えのないことが多い。

本当は答えなどないのに、人間はさも答えがあるようなフリをしている。そして、さもわかったようなフリをして、「これは良い」とか、「それはダメだ」と言っている。

わかったつもりでいるだけなのだ。

本当は答えなどない。

何が優れているかなど本当はわからない。

答えがないとすれば、どうすれば良いのだろうか。

それは簡単である。オナモミの例に見るように、両方用意しておけば良いのである。

答えがわからないから、たくさんの選択肢せんたくしを用意する。

それが生物たちの戦略なのである。

生物がたくさんの選択肢を用意することは「遺伝的多様性」と呼ばれている。

しかし、不思議なことがある。

自然界の生物は遺伝的多様性を持つ。

それなのに、「みんなが同じ」という生き物も多い。

多少の個体差はあるものの、たとえば、ゾウはみんな鼻が長い。鼻が短いという個性はない。キリンもそうだ。首が短いキリンはいない。チーターはみんな足が速い。人間は足が速かったり、遅かったりするのに、チーターはどれも足が速い。どうして、足の遅いチーターはいないのだろう。

それはチーターにとって足が速いことが答えだからである。答えがあるときには、生物はその答えに向かって進化をする。獲物えものを追いかけて捕らえるチーターにとって足が速い方が有利である。「足が遅いよりも足が速い方が良い」というのが、チーターにとっての答えだ。だから、チーターの足の速さに個性はないのである。

【③】

ゾウも鼻が長いことが正解だ。キリンも首が長いことが正解だ。答えがあるときに、そこに個性は必要ないのである。

それでは答えがないときはどうだろう。何が正解かわからない。何が有利かわからない。そのときに生物はたくさんの答えを用意する。それが「たくさんの個性」であり、遺伝的な多様性なのだ。

人間も同じである。

人間の目の数は二つである。そこに個性はない。答えがあるものに個性はないのだ。

しかし、人間の能力には個性がある。顔にも個性がある。性格にも個性がある。

生物はいらない個性は作らない。

個性があるということは、そこに意味があるということなのだ。

人間は足の速い人と、足の遅い人がいる。

それは、足の速さに正解がないからだ。

足が速い方がいいに決まっていると思うかもしれないが、そうではない。

生物の能力は「トレードオフ」と言って、どれかが良いとどれかが悪くなるようにバランスが取れている。たとえば、足が長ければ歩幅はばが大きくて速く走れるかもしれない。C、重心が高くなるので、不安定になって、転びやすくなるかもしれない。背が高ければ遠くまで見渡みわたせて天敵を見つけやすいかもしれないが、草陰くさかげに隠かくれるときには、背が低い方がいい。

【④】

どちらが良いかわからないのであれば、どちらも用意しておくのが生物の戦略だ。

人間に足の速い人と足の遅い人がいるということは、足が速いことはそうでなければ生きていけないというほど重要ではないということだ。もちろん、足が速いことは素晴らしいことだけれど、他の能力で足が遅いことはカバーできる。他の能力を捨ててまで、チーターのように人類みんなで足が速くならない方が良いというのが、おそらくは人間の進化なのだ。

ただし、それだけではない。

人類には人類の特殊とくしゅな事情がある。

生物としての人間の強みは何だったろう。

一三七ページで紹介したように、それは、「弱いけれど助け合う」ということだ。

ふしぎなことに、古代の遺跡いせきからは、歯の抜けた年寄りの骨や、足をけがした人の骨が見つかるらしい。D、狩かりに参加できないような高齢者こうれいしゃや傷病者の世話をしていたのだ。

人間は他の生物に比べると力もないし、足も遅い弱い生物である。だから知恵ちえを出し合って生き抜いてきた。

知恵を出し合って助け合うときには、経験が大切になる。経験が豊富な高齢者や危険を経験した傷病者の知恵は、人類が

生き抜く上で参考になったのだろう。色々な人がいれば、それだけ色々な意見が出るし、色々なアイデアが生まれる。

そうして、人類は知恵を出し合い、知恵を集めて、知恵を伝えて発展をしてきたのだ。

自然界は優れたものが生き残り、劣^{おと}ったものは滅^{ほろ}んでいくのが掟^{おきて}である。

もっとも、何が優れているかという答えはないから、生物は多様性のある集団を作る。しかし、年長いた個体や、病気やケガをした個体は、生き残れないことが多い。

しかし、人間の世界は、年長いた個体や病気やケガをした個体も、「多様性」の一員にしてきた。それが人間の強さだったのだ。

人間の世界には「弱い者をいじめてはいけない」とか、「人間同士で傷つけ合ってはいけない」とか、生物の世界とは違った法律や道徳や正義感がある。

残念ながら有史を振り返^{かえ}れば、人々が殺し合う戦争や弱い者が虐^{しいた}げられる歴史は繰^くり返^{かえ}されている。しかし、それでも人は、そのようなことは悪いことだ、人々は愛し合い助け合うのが本来の姿なのだとの底で信じている。

それはけっして人間が慈愛^{じあい}に満ちた生き物だったからだけではない。それは長い人類史の中で人間が少しずつ培^{つちか}ってきたものでもある。そうしなければ人間は自然界で生きていけなかったのだ。

ダメだなあと思うところもあるけれど、良いところもいっぱいある。

ダメだなあと絶望しながらも、やっぱり理想を求めずにいられない。

人間もやっぱり、そのままでもいいんだね。

(稲垣栄洋『ナマケモノは、なぜ怠けるのか? 生き物の個性と進化のふしぎ』による)

1.

A
D

にあてはまる言葉として適当なものを選び、それぞれ符号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　つまり　　ウ　しかも　　エ　たとえば

2. 本文には次の一文が欠落しています。この一文は【①】～【④】のどこに入りますか。最も適当な箇所を選び、符号で答えなさい。

あちらを立てればこちらが立たず。

3. 線部1「私たちには、個性がある」について説明した次の文の、I～IIIにあてはまる言葉を指定字数でそれぞれ抜き出しなさい。

人間以外の生き物はある程度のI (三字)はあるものの、種として得意なことで勝負するという、生存のためのII (四字)を持つが、人間は同じことであっても得意な人と不得意な人がいるように

III (五字)があるということ。

4. 線部2に「どうして神さまは、『個性』など生み出したのだろう」とありますが、ここでの「個性」の具体例としてあてはまらないものを選び、符号で答えなさい。

A Aさんは僕よりも算数のテストで良い点をとるが、国語のテストでは毎回僕のほうが良い点をとれるということは、得意な科目が異なる。

I 僕の弟は赤ちゃんと誰とも会話はできないが、僕が他の人と会話することができるといことは、年を重ねるにつれてできることは増えていくようだ。

U 僕はAさんよりも握力が強かったが、ハンドボール投げでAさんに負けてしまったということは、ボールを遠くに投げる力と握力は関係がない。

E Aさんは僕が困ったときにいつも助けてくれるが、Bさんはいつも僕に意地悪をしてくるということは、Bさんは人を思いやることが苦手なのだろう。

5. ———線部3「オナモミ」という具体例の効果として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 状況に合わせて二つの種子を使い分けるオナモミを例に出すことによって、実際には答えがないにもかかわらずわかつたフリをしてしまうのが人間の個性であると読者に理解させようとしている。

イ ゆっくりと芽を出す種子を持つオナモミを例に出すことによって、答えをすぐに求めるよりも状況に合わせてじっくり考えるほうが良い結果につながる可能性があるかと読者に理解させようとしている。

ウ どちらが優れているかわからない二つの種子を持つオナモミを例に出すことによって、自分と他人の能力がどちらのほうが優れているかを比べることに意味がないと読者に理解させようとしている。

エ 異なった性質の種子を二つ持つオナモミを例に出すことによって、どのような状況に置かれるかわからないときには複数の選択肢を用意することが大切であると読者に理解させようとしている。

6. ———線部4に「人間の世界は年老いた個体や病氣やケガをした個体も、『多様性』の一員にしてきた」とありますが、その理由を五十字以内で答えなさい。

7. 本文の内容としてあてはまるものには○、そうでないものには×をそれぞれつけなさい。

ア 自然界においては力が強く足が速いものが生き残り、力が弱く足が遅いものが滅びるのが掟である。

イ 特定の分野が苦手なことを自分の個性であると受け入れたとしても、苦手克服の努力をすべきである。

ウ 人間は他の生物と比べると知能が高いため、他者と愛し合い助け合う慈愛に満ちた唯一の生き物に進化した。

エ 人間も他の動物と同様に、生存上不要な個性は作らずに、必要かもしれない個性を用意して進化してきた。

オ 他人と比較したときに差を感じてしまう能力だとしても何らかの意味があるため、悲観する必要はない。

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

① 鍵^{かぎ}を拝借^{はいせつ}しよう。

② 背後^{かほ}に気配^{きはい}を感じる。

③ あきれて閉口^{へいこう}した。

④ 漢字の読み書きは国語の要^{かなめ}だ。

⑤ 台風^{たいふう}が猛威^{もうい}を奮^{ふる}う。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① メンミツな計画。

② リヨクオウ色野菜。

③ 社長をタイニンする。

④ アリがおかしにムラがる。

⑤ この会社^{かいしゃ}にツトめる。

国語解答用紙

[illegible]